

中学・高校における英語教育（2）

——研修・英作文による教師の自己研修・無生物主語構文——

大塚 巖*・英語教育研究グループ**

はしがき

今の英語教師を取り巻く環境には様々な問題がある。週3時間体制による英語学習の質と量の低減を補うべき教師の指導力の向上、学力不振者 (unsuccessful learner) への対応、国際化社会にあって英語教師に求められる英語力、国際化に呼応するように生じてきた英語指導助手 (Assistant English Teacher) との協同授業 (team-teaching) の在り方、激化する入学試験準備とのバランスのとれた英語教育の在り方、等々である。一方、時代の変遷にかかわらず存在し、英語教師であるならば、一定の見解を持たねばならない問題も数多くある。

この一年、当研究グループでは、上述したような問題について、あくまでも中学や高校の教育現場での体験を基にして、研究員それぞれの立場から意見を出し、討論を重ねてきた。たとえば、学力不振者への対応策としては、(1) 基本を繰り返し教え込む姿勢を持つこと、(2) 「易から難へ」、「既知から未知へ」、「段階的に」といった「学び易さ」の原理を重んじること、(3) 習熟度、個人差に応じた授業を心がけること、(4) 生徒が知的喜びや成就感を味わえるような授業を心がけること、等を考慮すべきであることが話し合われた。

いずれの場合も、並大抵の知識や努力で解決できるものではないが、今後も、討論を重ね、当研究グループの研究活動を実りあるものにしていきたいと考えている。

報告を兼ねて、この一年間に行われてきた主な研究発表のテーマと発表者を、以下に記しておきたい。

- 1 読解力に関する実験—Paragraph の構造と理解の関係 (5月) 川村義治
- 2 Bare Infinitive の分布と意味 (5月) 井東廉介
- 3 無生物主語構文の分類 (7月) 越田峰子
- 4 総称文について (7月) 田中一彦
- 5 英語教師の〈書く〉自己研修とその教育的意義 (7月) 竹森繁治
- 6 感嘆文の指導 (2月) 若林忠治
- 7 生徒にとって「学び易い」英語の授業とは (2月) 大塚 巖
- 8 二年間の研究活動の総括と『紀要』論文作成のための討論 (3月) 研究員全員

研究員の研修という意図をもって、下記のお二人の講師には、5月と2月の例会において、ゲスト・スピーカーとしてお話をいただいた。

山崎和恕氏 (鹿西高校)

能登の民話を英訳して

* 大塚 巖 金沢大学教育学部

** 加藤 行子 高岡中学

川村 義治 星稜高校

越田 峰子 高尾台中学

竹森 繁治 鹿西高校

寺島美紀子 松任農業高校

端崎 圭一 金沢大学付属中学

若島 浩正 額中学

齋木麻利子氏（金沢大学）

Stanford University に学んで

I 英語教師の研修について

いかなる職業でもこの世に存する職業は、何らかの社会的使命をもっており、その使命を全うするためには、日々の研修を必要としないものはない。英語の教師にしてもしかりである。

日本人であって、かつ、英語が教えられること、そこに英語教師の価値があると言われることがある。

英米人がその母国語である英語を教えるのではなく、外国人であるわれわれ日本人が外国語としての英語を教えるのであるから、考えてみれば、大変なことである。しかも、重層的で、複雑きわまりない構造をもち、夥しい数の語彙をもつ英語、日本とはまったく異なった文化的背景のもとに発達してきた英語、を教えるのである。英米などの英語国で子供時代を過ごし、そこで英語による学校教育・高等教育を受けた者でない限り、英語教師は、語学的にも文化的にも常に不完全であることを自覚させられる宿命にある、と言える。

英語を母国語にしている人が英語を教えられるかということ、必ずしも、そうではない。なぜなら、言葉が使えること、言葉が分かること、言葉を教えること、この3つは、関連性はあるものの、別個のものだからである。

- | | | |
|--------|---|---------------------------|
| 言葉を使う | = | 聞く・話す・読む・書く
ことができる |
| 言葉が分かる | = | 言葉の観察・記述・説明
ができる |
| 言葉を教える | = | 「人」である学習者に4
技能を身に付けさせる |

母国語話者というのは、母国語が使える、ということであって、必ずしも、母国語が分かる、ということではない。分かるためにはそれなり

の言語学的訓練が必要である。さらに、教えるということになると、「教える者」—「学ぶ者」という人間的要因が加わってくる。単なる技能や知識だけではなく、指導技術を含めた全人的要素、いわゆる指導力というものが、問題になってくるのである。

日本人でも、英語の4技能にすぐれていて英米人とかかなり自由に意思の疎通ができる人もいるし、また、英語についての言語学的知識が豊富な人もいる。そういう人が教え方が上手かということと必ずしもそうではない。英語教師としては、英語の駆使力と英語についての知識（合わせて「英語力」とも呼ぶことができる）、が基本であるのはもちろんであるが、これに加えて、やはり、指導力が問題になってくるのである。

「指導力」とは、何か、といった原理的追及は別の機会に譲るとして、指導力を向上させるための心得を挙げるとすれば、まず、「常に授業改善を念頭に持っている」ということである。

もし、教師が、Wilga Rivers(1981:7) が言及しているような教師つまり、

…teachers teach as they were taught by
teachers who taught as they were taught
…

<・・・教えられたように教えていた教師に習った自分は次には自分も教えられたように教える・・・>

自分が昔教えられたような教え方で教えることに甘んじているような教師であるならば、毛頭進歩はありえない。自己の授業の工夫・改善が求められるのである。そのためには、研究授業や公開授業に参加したり、あるいは日頃の他の英語教師の授業や英語以外の教科の授業をできるだけ多く観察して、優れた授業の要件を知ることが、一つの方法である。観察に当たって注目すべき点としては、次のようなことが考えられる。

- (1) 教師の話し方（速さ、間の取り方、無駄の無さ、明晰性、等を含む）
- (2) 教師の働きかけに対する生徒の反応の様子（特に、生徒の主体的活動を引き出すことに成功しているかどうか）
- (3) 発問の仕方（どのような意図で発問が行われるか、クラス全体に対してか個別的か、等）
- (4) 生徒の反応に対して教師は適切なフィードバックをしているか（特に、答えの取り上げ方、正解の与え方、誤答の場合の処理の仕方）
- (5) 授業の雰囲気を含め授業全体のリズムと流れ

その他、常日頃から授業改善についていろいろな問題意識を持っていて、その問題についての解決の糸口を見つけるようなつもりで授業観察に臨めば、得るところは多いはずである。

指導と言え授業と言え、教育というものは、須く、上記(2)から(4)に示したような「教師の働きかけ→生徒の反応→教師によるフィードバック」がスムーズにうまく行われているか否かが一つの眼目であると言ってよいと思う。

少し遡って、「言葉を使う能力」、いわゆる4技能について、教師の自己研修の観点から触れてみたい。4技能は次のように整理できる。

[4技能]

	話し言葉	書き言葉
理解の面	： <聞く>	<読む>
表現の面	： <話す>	<書く>

話し言葉と書き言葉を比べてみると、話し言葉は瞬時的に進行し、時間的猶予が許されない。一方、書き言葉は、読むにせよ書くにせよ、読み手・書き手に十分な時間的余裕が与えられている。別の言い方をすれば、<読む><書く>という行為を音声を通じて瞬時的に行うのが<聞く><話す>という言語行為である、ということである。

特殊な環境にある人を除き、日本の多くの英語教師にとっては、日常生活で英米人と接する機会は少ないであろうし、話し言葉の能力を高めることが困難なのはいたしかたないであろう。一定の水準に達した英語の学力を持ち、かつ、英語の音声の特質、調音の仕方に通じていれば、いわゆる「慣れ」によって、話し言葉は操れるようになるものである。したがって、今以上に話し言葉に上達しようと思うならば、もちろん話し言葉に触れることも必要であるが、言語行為に時間的余裕の許される書き言葉に重きを置き、その訓練を重ねておく、ということが、実行もしやすい賢明な方策のように思われる。

本稿の第II章「英語教師の<書く>自己表現研修とその教育意義」（文責 竹森繁治）は、日本の英語教師が一般に不得手と言われている<話す>能力を高めるためには、どうしたらよいかを考察したもので、(1) 話すべき内容がなければ話せない、(2) 書く訓練を積み重ねることによって話せるようになるはずだ、という考えに立ち、具体的には、メモ、日記、手紙、生徒への通信文、教育論、人生論、身の随想など、事ある度に英文を書いてみることを、いわゆる自由英作文を自己に課すこと、これが英語教師にとって内容のあることを<話せ>ようになる最良の方法である、と論じている。これは、上段で述べた「話し言葉に上達しようと思えば、言語行為に時間的余裕の許される書き言葉に重きを置き、その訓練を重ねておく」ということの一つの具体的方策である。

切羽つまれば意外と話せる、ということがある。<聞く>ことと違って、<話す>ことは自分のペースでやっていける。要は、英作文をするようなつもりで話せばいいのであるから、一定のレベルの英作文力がある人ならば、話すことはできるはずである。ただ、日本のように英語が第二言語でなく外国語である地においては、目標言語を普段の生活において、あるいは切実な必要性から、使う機会はまれであるので、極力、機会を見つけて、話をせざるを得なくなる

ような環境に身を置く、ということも考えてよいことである。

次に、「理解の面」と「表現の面」を比べてみる。4つの技能の間には、相関性あるいは相乗効果といったものは認めることはできようが、必ずしも、一対一の対応関係はない。「自分で調音できる音声は聞き取れる」とか「自分で話せる内容はかなりの速度で話されても分かる」とか言われるが、これは経験的に見て事実である。つまり、「表現」できることは、必ず、「理解」できるのである。

「表現」という言語行為は、「理解」の面に比べて、より能動的であり、より多くのエネルギーを必要とする。したがって、当然、「表現」能力を高めようとする努力や訓練にはそれだけの困難が伴われるわけである。しかし、このことに取り組むことが、「表現」のみならず、「理解」のキャパシティをも大きくし、かつ、「理解」を深くすることにつながるのである。よく、「英作文をするようなつもりで英語を読め」とか、「書くのと同じようにゆっくり時間をかけて読め」とか言われるが、これも主旨は同じである。

次に、「言葉が分かる能力」について触れてみたい。「言葉が分かる能力」とは、言葉を観察し、記述し、説明する能力のことで、まさしく、言語学・英語学の分担領域である。「英語学を学ぶのは何のためか——英語がよく分かるためである。」と言ってよい。教員養成の過程で得た音声学、英文法、英語史、等の英語学の知識は、あくまでも基礎的教養であって、日々接する英語の教材を資料 (data) と見なし、自分なりの言語観、文法観を形成しながら、自分なりの分析・説明を心がけていく、という姿勢が必要である。教育見地から見た英語学的素養の問題については、別の機会に、詳しく述べてみたいと思っている。

以上、英語を教えることに関わる、いわゆる「自己研修」というものを、英語を使う能力、英語が分かる能力、英語を教える能力、という3つの観点から、考察してきたわけである。

教師の資質の向上を目指して、公的機関や私的団体によって、研修会や講習会、公開授業などがもたれている。学校教師は教科指導、生徒指導、学校行事、クラブ活動の指導、等々で多忙であるが、可能な限り、研修プログラムに参加し、研さんを積んでおくことが望まれる。

筆者は最近、実際にどのような研修プログラムが企画されているかを調べてみた。知りえたものの一部を参考までに以下に記しておきたい。

63年度に石川県教育センターと金沢市教育センターが行う英語関係の研修講座・研修会の名称とその研修内容は、次の通りである。

[石川県教育センター]

- (1) 中学校英語科研修講座 (4日間)
 - 英語指導員 (Assistant English Teacher) とのチーム・ティーチング
 - 言語活動としてのリーディングの指導
 - 授業実践事例と研究協議
 - 指導法研究
- (2) 高等学校英語科研修講座 (4日間)
 - 英語指導員とのチーム・ティーチング
 - 言語活動としてのリーディングの指導
 - コロキアム (colloquium) (英語教育)
 - コミュニケーション・エクササイズ
- (3) 長期継続研修講座 [中学校英語科教材作成] (年間を通じて12日間)
 - 教材研究
 - 領域別自由研究
 - 創造的教材の作成
- (4) 長期継続研修講座 [高等学校英語科 (年間を通じて25日間)]
 - 個人研究とワークショップ (創造的学習)

[金沢市教育センター]

- (中学校) 英語科担当教員研修会 (3日間)
- わかる喜び、学ぶ楽しさを味わわせる指導法
 - 自己表現力を豊かにするための教材の利用と研究

- 外国人教師(AET)との望ましいティーム・ティーチング
- TP自作の基礎知識——実技講座および制作実習
- 授業に結びついたTPの自作の実際と活用例

(以上の研修講座・研修会についての記述は、石川県教育センター研修指導主事 坂 範子、立中英夫の両氏および金沢市教育センター研修指導主事 松井 正氏、に提供して頂いた資料に基づいている。)

(以上文責 大塚 巖)

II 英語教師の<書く>自己表現研修とその教育的意義

1. はじめに

たまたま6年前、MEFの学校訪問を受け懇談した際、自分の考えを即座にまとめ英語で表現することができず、実にくやしい思いをした。このくやしい体験を契機に、「(1)話す内容が無ければ話せない、(2)<書く>訓練を積み重ねることにより話せるようになるはずだ」という考えに立って、<書く>ことの自己訓練を開始した。友人への手紙、日記、研究サークルの会員通信(月刊)、教科通信、実践報告など、できるだけ英文で書くことを自己に課すことにしたのである

また<書く>自己表現の自己研修を継続する一方、友人の勧めもあって、外国のヤングと語る会、高校生のサマーセミナー、国際理解の集いなどへ参加したり、サークルの研究会にネイティブを招くことやMEFの学校訪問要請、更には自宅への招待なども実行して、<話す>方面での自己研修にも自発的に取り組んでみた。

これらの研修を通して、それなりの成果をあげることができたと思っているが、この報告書

では、「話せない」英語教師にとっての<書く>自己表現(Writing)訓練の意義——自己研修としての意義、及び、英語指導に波及する教育的意義——について、過去6年間の個人的体験に即しながらまとめてみたい。

2. なぜ<書く>自己表現か ——「書ければ話せる」

6年前、MEFに対してうまく意志の伝達ができなかったとき、私が考えたのは「いざというときに英語が口をついて出てくるためには、日常的に英文をくつくる>訓練、即ち、英語を<書く>訓練をすることが必要だ」ということだった。英語を<話す>ための訓練というと、多くの人は、ラジオやテレビの英語会話講座を考えるのではないかと思うが、私は次のように考えたのである。

「<書く>ことの継続的訓練が、英語的頭脳の活性化を促し、語句のストックもできる。単なる和文英訳ではなく、自分の身の出来事、自分の意見、感想、あるいは思想を英文化する訓練をしていると、必要なときに必要な語句や表現を、完全な形ではないにしても、記憶の引き出しから取り出すことが容易なはずだ」と。

それ以来6年間、英文を書き続け、その間に何回かネイティブと話す機会もあったが、私の<話す>力(speaking ability)は明らかに向上していた。(向上したといってもたいしたことではないが。)その後、いろいろな英語の専門家たちがspeakingとのからみでwritingを奨励していることを知り、私のように「話せない」日本人がspeakingの力をimproveするための最も良い方法は、<書く>自己表現(self-expression through writing)を日常的に実践することだと確信するようになった。

「英語道」の達人松本道弘氏は、その著『英語——何をどう書くか』(講談社新書)の中で、「書ければ話せる」(p.24)「書くとはtalking on

paperである」(p.14)と述べ、「英会話を書く」というユニークな表現(p.7)を使って、英語修業の初期の段階での「書く」ことの大切さを説いている。そればかりか、上級者に対しても、「英語がスラスラ話すようになりたいという人に対しても、まず英語を書かせるべきではないかと最近考え始めている」(p.158)と述べて、self-expression through writing を奨励している。

平均的日本人は、まだまだ日常頻繁にネイティブと接する機会に恵まれていない。そういう意味では、<話す>訓練をすることは難しい。小川芳男氏は、その点を考慮して、つぎように言っている。

「日本語と英語とに限らず、現在最も必要なのは production <発表力>であろう。日本人はもっと話したり書いたりする力を養うべきである。そのためには話す技術や書く技術もたいせつであるが、話すべき内容や書くべき内容をもっていることがそれに劣らざたいせつである。(中略)発表力と言ってもわが国においては英語を話す機会は極めて少ない。したがって実際の訓練としては書くことの訓練をもっとやったらどうであろう。(『外国語の教え方学び方』国土社、p.181)

<英語が上達するためには thinking in English の習慣を身につけなければいけない>とよく言われるが、学校で6年以上英語を習ったのに話せない平均的日本人で、しかもネイティブと接する機会のほとんど無い人にそういうことがはたして可能だろうか。次は、小田実氏の意見である。

「私が英語をとにかくにも話すようになったのは、二十六歳、アメリカに留学してからのことである。だから、私の英語はまさに書き英語を通じての英語だ。簡単なこと

なら英語で考えるというようなことをやっているだろうが、複雑なことになると、たとえば、安保について議論をとりかわすというようなことになると、私は頭の中で急速に英作文を作っているような気がしてならない。(中略)私に判らないのは、英会話を学びたくなると、人が会話学校か何かに行くことである。あれほどアホらしいことはない。(中略)それより英作文(それも<イングランド>的英作文だ)の練習をして、どんなことでも英語で言えるようにするのが、近道ではないか。」「(『私の外国語』中公新書、p.64-65、なお、<イングランド>という用語の説明については、同書のp.59-63を参照)

松本道弘氏は、英語修業の初期には「自分の思考を外国人に聞かせる前に先ず英作してみるという<間>が必要だった」(前掲書p.7)と言い、大森実氏は、「<話す力>の基本姿勢は、英文法だと思う。英文法というよりも、英作文の練習が土台になる。瞬間的に英作文を、頭の中で作って、それを言葉にするのだから、英作文の訓練をやり給えといいたい」(『私の外国語』p.55)と書いている。

日本人は、日本語で思考し、それを英作して(日本語→英語への変遷の速度に大きな個人差があるのだが)しゃべっていることは明らかである。<話す>という点で英語修業の初期段階をうろついている平均的日本人は言うに及ばず、海外で活躍する日本株式会社の商社マンたちもしかりである。『英語は度胸』(日商岩井広報室編、ゴマ書房)は、次のように述べて、商社マンたちの活動も<書く>自己表現=英作文に大きく依存していることを明らかにしている。

「自分が何を言いたい、まず頭の中で日本語に整理してみること」(p.99)

「電話で話したいことは、前もって作文しておく、ドキドキしなくてすむ」(P.51)

「自分の言葉で英作文をすることによって、相手に伝えるべきことが整理される、という効用もある。英作文の効用は、一般の人が想像するより、はるかに大きい」(p.52)

<話す>ことと<書く>ことは、productionという点で共通性を有しているから、当然といえば当然のことであろうが、学者の研究でも、<話す力>と<書く力>の相関は低くないという結果が出ている（『英語のスピーキング』岡秀夫編集、大修館書店、pp.36-37）。ところが、日本人の英語力はというと、「言語要素に関する知識を中心として分割された能力しかないという特徴が認められ、そのため、総合的な操作が要求される言語技能というレベルでは、有機的に機能しえない」（同書 p.37）という。こういう状態になっているのは、日本人の英語学習には、<話す>ことはもちろん、<書く>自己表現の訓練が欠けているからに他ならない。

以上、いろいろな人の意見や主張をみてきて、日本人が<話せる>ようになるために、<書く>自己表現がいかに有効であるか、が理解できたと思う。ここで、「英文はネイティブのチェックを受けなくてよいのか」という声が聞こえてきそうなので、その疑問に答えておかなければならないだろう。この疑問にたいしては、小田実氏、鈴木孝夫、松本道弘の三氏の意見が示唆的である。

小田実氏は、<イングラント>的英語（ネイティブの英語とは異質だが、とにかく自分の言いたいことをわかってもらえるような英語）でよい、という意見だが、私もそれでいいのではないかと思っている。氏の言うように、少々変な英語であっても、言いたいことをドンドン言えるように訓練することのほうが大切だと考えるからである。

鈴木氏は、the need for learning English as a means of international communication を強調しつつも、その英語については、“native English”ではなくて“international English”でよい

とし、小田氏同様、とにかく思ったことを話すことが一番大事なことだと言っている。

International English should be within equal reach to all non-English speaking people, not necessarily the same as spoken in Britain or America, although the basic rules show no change between the two... Japanese people should speak English freely in a way it can hardly be understood by native English speakers... Many Japanese want to speak up but they usually don't because of the heavy burden of abiding by the complicated rules and grammar of what is called “standard” good English. Most important is to speak up. (The Daily Yomiuri, Oct.23, 1980)

そして、氏は、“International English”を提唱する理由として、“the present practice of using native English respectfully and thankfully will keep the Japanese people under British and American supremacy and the Japanese can never emerge from this linguistic slavery.” (Ibid) と述べている。

ネイティブと接する機会も少なく、小田、鈴木両氏の考えにも不満を感じる人には、松本氏のアドバイスが役に立つであろう。氏は、「日記に書かれた英語はでたらめでもいい。捨てるために書かれた英語であるから、たとえまづい英文であっても、それは未来にベターな英語を書くための“捨て石”である」（前掲書p.155）と言い、ベターな英語を書くためには、ネイティブの書いた英語をよく読み、“借文”することを勧めている。

私自身は、小田、鈴木両氏の考えに与しつつも、松本氏のアドバイスに従い、英字新聞や雑誌、その他の本をできるだけ読んで、少しでも英語らしい表現に近づくように努めていきたいと思う。

3. <書く>自己表現研修の具体的内容 ——「手紙」の場合

私が6年間に書いた英文を大別すると、次の4種類になる。

- (1) 手紙、日記
- (2) 研究サークルの会員通信(月刊)
- (3) MEFへの連絡
- (4) 実践報告

この中で一番時間とエネルギーを割いたのは、(2)「研究サークルの会員通信」であったが、<書く>こと=talking on paper と考えるならば、<話す>こと(talking)と最も密接な関連があるのは「手紙」であろう。そこで、ここではいくつか「手紙」の具体例を挙げてみようと思う。

さて、手紙の内容だが、日常の身近な話題が圧倒的に多いことは言うまでもない。しかし、時には本や映画の感想、教育論、人生論もあり、いろいろなことが書いてあって、今読み返してみると実に楽しい。いくつか紹介してみよう。

(1) 日常の身近な話題

◇ June 16 was Father's Day. The previous day my oldest son came to me and said, "Dad, lend me 1000yen, please. I'll return the money when I get my allowance for this month from Mom." I asked, "What are you going to do with the money?" Then his answer was; "I will buy a Father's Day present. I promised to go and buy one with a friend today." As soon as I gave him a 1000 yen bill, he dashed out to buy a present.

What do you guess he bought for me? I could not help but smile when I found that he had bought a can of beer, peanuts and dried squid. How wise he is! O. Henry might have counted it as one of the "Gift of the Magi." It is the best

present that I have ever got.

(June 22, 1985)

(2) 本や映画などの感想

手紙には、本、映画、演劇などについての感想も時々書いている。1985年11月27日には、高文連文化教室で鑑賞した『島清、世に敗れたり』の主人公島田清次郎について、杉森久英の『天才と狂人の間』を引き合いに出しながら論じているが、これは、「島清は女性の敵だ」という友人の意見に対して私見を述べたものである。

◇ In my view, Seijiro was an enemy not only to women but to human beings as well. Saisei Muroo, it is said, found out contempt of human beings hidden in Seijiro's heart and avoided relations with him.

According to Hisahide Sugimori's "Tensai to Kyoujin no Aida," Seijiro's view of women was different from that of an ordinary youth. He regarded women as *goods* to be sold and bought with money, and he believed that only rich men could "buy" beautiful women. Seijiro got this view, Sugimori says, because he was brought up at prostitute quarters, observing women as men's toys or goods.

I wonder if Seijiro really believed in human beings' equality. To be sure, he lived in the age of what is called "Taisho Democracy" and read some books on socialism, which gives priority to equality of human beings. And his bestseller novel "Chijo" was highly praised by socialists, especially by Toshihiko Sakai.

Judging from these facts, it seems to me that Seijiro's *mind* did realize the idea of socialism but his *heart* didn't. In

his heart he hated and looked down upon other people.

I also dislike a person like Seijiro, but his short life full of various happenings is no doubt a good subject to a novelist. I really enjoyed reading Sugimori's "Tensai to Kyoujin no Aida."

(3) 教育について

職業柄、学校でのことや教育について書くこともよくある。ここでは、1981年5月10日頃(日付がはっきりしない)に書いたと思われる手紙の中から、現在の教育について嘆いている部分を紹介してみよう。

- ◇ What is "real" education? I don't know for certain. But I think a teacher's main job is to help students who can't study for themselves or don't know how to study. As for the students who can study for themselves, he has only to answer their questions and encourage them to study further on.

The late Hiraku Tohyama once said; "High school teachers should bear in mind that it is not their business at all to have their students pass the entrance examination for college or university. What they have to do first of all is to have all the students acquire fundamental knowledge necessary for them to live in the future."...

Today it seems to me that there is a much more important thing to be done but to be neglected at school. What is really necessary for us teachers to do, I believe, is not to train our students to get higher marks in the entrance examination but to teach them to cooperate, to help one another in studies as well as in

homeroom activities, club activities and other group activities. Students must learn to love and help each other rather than to compete with others.

Thinking about the present state of school education, I can't help being pessimistic. We are much like the slave drivers who watched slaves in the cotton fields so that they might not neglect their work or escape and by whipping compelled them to work under the burning sun day after day.

(4) 人生について

仏教に興味のある私は、解説書や『歎異抄』などをよく読む。そのためか、手紙の中に、ときどき仏教の教えについて書いているが、次の手紙には、高田好胤の『母一父母恩重経を語る』(角川文庫)から得た教えが書かれている。

- ◇ I am afraid that you are busy at home as well as at school. The other day when I met Mr. S—at the "Ken-iinkai," I asked him how you are getting along. Then he said, "Her mother-in-law or someone else in her family seems to be ill." Is he right?

By the way, do you know "Bumo-Onju-Gyo"? ("Bumo" means father and mother.) It is a sutra of Buddhism which tells us about the greatness of parents' love, especially of mother's love, and how we should repay their self-sacrificing love. According to the sutra, it is one of the highest virtues to take care of mother (mother-in-law included) who is ill in bed. I, who am not taking care of my old sick father, may not have the right to ask you, but please take care of your mother-in-law. And also take good

care of yourself. (1986. 2. 4)

以上、具体的な<書く>自己表現の実践例として、いくつかの手紙を紹介してみた。

4. <書く>自己表現の研修の教育意義

2章「なぜ<書く>自己表現か——書ければ話せる」で既にのべたように、英語を<書く>訓練(研修)は、なによりもまず、<話す力>を向上させることが目的だったのだが、6年間の自己訓練で、ある程度の成果を得たことは間違いない。<書く>自己表現研修の意義の一つはこの点にある。次に、「書く内容がなければ書けない」から、トピックスを求めて、さらに英語らしい表現を求めて、英語の本、雑誌、英字新聞など多くの英語を読むようになった。そして、気のついたときはメモする癖がついたし、時には、これは英語でどう言うのだろうと、頭の中で英作文をしていることもある。

また、日本語で手紙や葉書さえ書かなかった私が、英文手紙をかなり頻繁に書くようになったおかげで、逆に日本語を書くのが以前ほど苦にならないようになるという効用まであった。

このように、<書く>自己表現研修は、教師自身のいろいろな力を高める効用があることがわかったが、それだけにとどまらず、研修の成果が生徒の英語学習指導にも波及して行くという点で教育的にも意味があり、その意義は大である。次に、その教育的意義について述べてみたい。

<書く>自己表現を始め、たとえ相手が日本人であっても、コミュニケーションの道具として英語を<使う>楽しさ、面白さを味わった私は、生徒にも同じ喜びを経験させ、生きた英語学習のワン・ステップにしたいと考えた。そして、1982年10月頃から普通高校で実践にとりかかった。この年と翌年の農業高校での実践については、石川県高等学校教育研究英語部会の機関誌『英研会誌21号』に詳しく発表し、1984

年の実践については、石川県教職員奨励研究で報告したので、それを参照して頂きたい。

教科書の中の重要構文(または語句)を使つての短文づくり、英文年賀状、英詩づくりから卒業記念英文集へと自己表現を進めた生徒たちは、次のような感想を残している。

(すべて原文のまま)

◇ 英語を習って6年間中、へたながらも詩を書いて、その詩を英文に直し、できたときのうれしさ。ちっぽけだけど、私が生まれてはじめて大きな英語に心から笑えました。ぜんぜんだめだったけど、みんなの足をひっぱってきたみたいだけど、最後に卒業を目の前に楽しく、おもしろく勉強してきた。

“先生ありがとう”

◇ 今年度は初めて英文の年賀状や詩を書くことができ、今まで英語とは近よりがたい存在であったはずなのに何となく身近な存在となってきた。

(以上、農業高校生、1983)

また、1982年の生徒(普通高校)の作品については、それをまとめてMEF(女性)にチェックしてもらったのだが、彼女から、“Reading this booklet you compiled was so fun! I especially enjoyed the students' sense of humor.... I've never met your students but already I think they're great!”という感想を頂いた。

その後、私の関心は、低学力の生徒の実態に合った<読み物教材>作りへと移り、その仕事に時間とエネルギーをとられたため、計画的に自己表現をさせることはできなくなったが、3年生の卒業記念英文集だけは継続している。

この英文集に載せるのは自己紹介と英詩と決めている。自己紹介は、決められたパターンで書くので、楽にできるが、問題は英詩の方だ。最初日本語の詩を作って、それを英語に直すの

だけれども、まず、なかなか日本語ができない。次に、時間をかけて作った日本語が、簡単に英語に直せるようなシロモノではないことが多い。例えば、「名前はマイケル。我が家に来てまだ4カ月。すっかり大きくなりました。」という日本語を書いて、“His name is Maikeru. My house came still four months. All became grow.”と英訳してくる。そんな時私は、「彼は（たった）四カ月前に我が家へ来た。彼は今は（もう）大きい。」と英訳しやすい日本語に直してやり、「<彼は>に続いて、後ろから順に、<来た><我が家へ><四カ月前に>と英語にしていけばいいだよ」とアドバイスして、それを英訳させるのである。そうすれば、どうにか英語らしくなってくる。

このように手間暇がかかるし、始めはイヤイヤやっている者もいるが、清書し、イラストをつけて出来上がった時の満足感は大きいようである。この喜びを大切にしたいと思う。

自己表現は単文だけで十分だ、というのが私の考えである。低学力の生徒が、日本語と英語の単文の構造の違いをしっかりと認識し、自己表現出来る力を養うのに役立つような<和文英訳>（並べかえて英文をつくる）の練習問題プリントを作ろうと、今、とりかかったところである。

5. むすび

この小論で、私は、自分自身の自己表現研修の具体的実践例として<手紙>を紹介するとともに、この個人体験と専門家たちの意見をもとに、英語を話せるようになるために<書く>自己表現訓練（研修）がいかに役立つかを論じ、さらにそれが英語学習指導に及ぼす効用についても言及した。6～10年英語を習ったのに「話せない」平均的日本人が英語コンプレックスから脱却し、ある程度「話せる」ようになるための一つの戦術として、<書く>自己表現訓練が非常に有効だ、というのが私の主張である。「話

せない」英語教師をふくめた一般人だけでなく、口を開きたがらない生徒にもこの戦術は効果があると確信している。

（文責 竹森繁治）

III 無生物主語構文の分類

1 はじめに

本稿で扱う無生物主語構文は、たとえば、

The year saw many changes

のように、本来的には「有生 (animate)」の名詞を主語とすべき動詞が、「無生 (inanimate)」の名詞を主語としていて、目的語を持つ構文である。この形は、日本語にはない表現構造とされている。したがって、英語の表現形式をそのまま日本語の表現形式に移しても、自然な日本語とは感じられないのである。

教室でこのような構文を扱う場合、「理屈を考えないで暗記しなさい」で片付けてしまったり、「これは英語らしい表現だ」の一言で終わってしまうことが多いようである。また、せいぜい、無生物主語にはどういう形のものが多いか、それに対応する動詞にはどんなものが多いか、といった皮相的な説明に終わってしまうこともある。

無生物主語構文について、その狭い意味の文構造の解明というよりは、日本語との比較とかこの構文の全体的意味というものに基点を置いて、捉え直してみたい。

筆者は、無生物主語構文の文例を100余例まで集めることができた段階で、6通りに分類してみたが、本稿では紙面の関係で41例だけを扱った。

2 英語で無生物主語構文が好まれる理由

まず、なぜ英語の無生物主語構文が好まれるのか。幾つかの解釈がなされているようだが、従来の主だったものを要約してみると、次のようになる。

- (1) 英語で最も好まれる文の意味構造は“actor—action”構造、つまり動作主が主語となる構造である。本来、動作主となり得るのは典型的には人間であるはずなのだが、英語ではこの意味構造の文型があまりにも確立している為に、人間以外の物も、動作主の占めるはずの位置に入れられるようになり、本来動作主として機能する力のない物にまで広い範囲で、そのような特性が与えられるようになったから。
- (2) 英語では、状況を捉えるのに、ものの動作主に注目して、因果的に解釈し、概念化しようとする傾向が強いから。

3 日本語の文との対比

(1) 対応する日本文の問題

Chance has thrown us together at a skiing resort.

この文に対応する日本文を考えようとする、幾通りか考えることができるが、結局は人に最もわかりやすい、素朴な日常の話し言葉に近い表現が基準となってくる。

偶然、スキー場で出会いました。

そしてその為には発想の転換が要求される。つまり、英語と日本語の主語の違いについて明らかかなことは、英語の主語は動作主であるのに対して、日本語では動作主としての特性が希薄に感じられる場合が多いということである。た

例えば、

天皇陛下におかれましては、自ら木の苗をお植えになりました。

この文では、天皇陛下は動作主であるが、場所化するという形を通じて、動作主としての特性を希薄なものにしている。そうすることによって個人に対するあからさまな指示を避けようとしている、と考えられる。

この傾向は敬語に顕著な一面だとしても、日本語の特性に基いて対応する日本文を考えようとする時は、英語では物を主語にした構文になっても、日本語では人間を主体にした表現に変えた方がついていきやすく、自然な日本語になってくる、ということがわかる。

(2) 日本語の無生物主語構文

では、日本語の文において無生物が主語となっている場合があるのか。あるとすればどんな場合か、具体例をあげてみると、

- 1) 旧氏族には奇人が多い。時世が彼等を奇人にしてしまった。
- 2) お前たちが六つと五つと四つになった年の八月の二日に死が殺到した。死がすべてを圧倒した。そして死がすべてを救った。
- 3) 書棚は書物のみでなく、お客さんの種類まで私達に教えてくれた。
- 4) 芳子の顔はいよいよ赤くなった。時雄は激せざるを得なかった。事実は悲しい力で彼の胸を刺した。

これらはいずれも文学作品からの引用だが、慣用的な一つの文形式とみるよりは、技巧的、修辭的な色彩の強い、比喩的な表現と考えた方が自然な文章である。

一方、日本語の文で自発形をつくれる他動詞が自発態をつくる場合は、無生物が主語になり

得る。

- 1) ガラスが割れる。
- 2) ぼたんが取れそうだよ。
- 3) 沖に白帆がみえる。
- 4) 昨夜の火事で家が10軒焼けた。
- 5) 歯が抜けそうだよ。

しかし、これらはここで扱っている他動詞の無生物主語構文とは全く性質を異にしている為、比較対照の対象とはなりえない。

(3) 日本語における無生物の扱い

従来、日本文において「無生物」がどのような位置づけられてきたのか考えてみると、「生物」と「無生物」という区分けはしないで、「有情」、「無情」（又は「非情」）という範疇で区分けがなされている。そしてその有情か無情かの区分けの基準は、その自意識が認められるか、認められないかによる。更にそれは動詞アルとイルによって使い分けられている。

- 1) あそこに魚屋がアル。
- 2) あそこに魚屋さんがイル。

つまり「生物」（有情のもの）を表す場合はイルが使われ、「無生物」（無情のもの）を表す場合はアルが使われる。しかし、次の例の場合では、

- 3) 昔、おじいさんとおばあさんがアりました。

この「おじいさん」と「おばあさん」は非特定の人物なので、その個々の自意識を積極的に認めなくてもよい表現と解釈され、この「おじいさん」と「おばあさん」は無情とみなされて、アルが使われていると解釈できる。

4 無生物主語構文の分類

(1) 名詞化 (nominalization) を受けた場合

ここでは例文の名詞句の部分を、動詞中心の発想に置き換えて、人間を主体にした文に書き換えることができる場合を、名詞化を受けて英語らしい表現になったと解釈する。書き換えのできる部分は、→の後に併記した。

- 1) *The writer's awareness that the opinion he sets forth is controversial* leads him to offer reasons in support of it.
→The writer is aware that the opinion he sets forth is controversial...
- 2) *The stunning crash of the audience* greeted her.
→The audience crashed stunningly...
- 3) *The ordered elegance of the scene* had the charm of an eighteenth century picture.
→The scene had the ordered elegance...
- 4) *His language proficiency* permitted him to understand both the profound and inane utterings of people around him.
→He is proficient in language...
- 5) *A sudden feeling of joy and relief* filled him.
→He felt joyful and relieved suddenly...
- 6) *The sight of them, so intent and so quick,* gave Bertha a curious shiver.
→Bertha saw them so intently and

quickly,...

- 7) *The marvels of modern technology* fill us with amazement but also with dread.
—We marvel at modern technology...

- 8) *His admiration for her beauty* blinded him to her faults.
—He admired her beauty...

(2) 因果関係を表す場合

- 1) Most forms of expression compel us to translate information into the active vocabulary we habitually employ.
- 2) Any attack on intellectual liberty, and on the concept of objective truth, threatens in the long run every department of thoughts.
- 3) Bad reading habits formed in early years require correction later.
- 4) This information operates usually to reinforce traditional attitudes.
- 5) His actions brought smiles to the faces of the men grouped around him.
- 6) The word roused him to fury.

(3) 事象、現象の叙述

- 1) Her tears increased her emotion, and she pressed the little boy to her heart.
- 2) The unaccustomed brandy had left a few taste in his mouth and his head was beginning to ache.
- 3) His dusky skin had the silvery glisten of youth still.
- 4) In his own office the sense of home surrounded him.
- 5) His manner agreed me.
- 6) The sixth annual report of the Library

records a successful year.

- 7) Time will not permit me to touch upon it more than very briefly.
- 8) The company has experienced a most unremunerative year.

なお、どの程度までを因果性の高い文とみなすか、それによって(2)因果関係を表す場合と(3)事象、現象の叙述との間で分類のしかたが違ってくると思われるが、ここでは一応その文が形づくられる背景に、論理性的の追求が基底となっていることが意志的な作用として働いているのが感じ取れるかどうか、に境界線を引いた。

(4) 身体の一部が擬人化された場合

- 1) "Quite," and his eye caught sight of the coat and hat on the floor.
- 2) "Do you like me?" said she, and her tone, sweet, husky, troubled him.
- 3) "Have you a garden?" said the cool, sleepy voice.
- 4) And his kind, flushed, almost pitiful glance roped them all in again.
- 5) As she turned to him something in her soft, wondering look made George feel that for two pins he would jump over the table and carry her off.

(5) 修辭的効果をねらった文学的表現

- 1) A merciful forgetfulness would help him to take up once more the burden of life.
- 2) Memories built themselves with almost architectural order.
- 3) Age closed his mouth, paralysed his power to fight.
- 4) Loneliness gripped him so that his breath quickened.

- 5) Absolute silence seized all things.
- 6) The town piled roof on roof from the great bridges over the water to the Cathedral crowning the slopes.
- 7) The village looked across the river and the plain to the mountains.
- 8) The city will employ the time of the visitor profitably and ageeably for days.
- 9) A heavy rain visited the city.

(6) 慣用法的表現

慣用法的表現とは、ここでは一般的に通用している確立した、標準的な使用形式と考える。

- 1) After a while the train gave a jerk and started.
- 2) How does the idea strike you?
- 3) This music pleased John.
- 4) The noise kept me awake all night.
- 5) Twenty-four hours make a day.

(なお、引用した出典は辞典、小説家、評論家の作品及び表現集、文法書である。)

5 おわりに

コンテキストからみた無生物主語構文はどの

ように分類できるか、試みてみたわけだが、もちろんこういった分類ができたからといって、無生物主語構文そのものを全て理解できたことにはならないし、分類化それ自体も独断的な面が否めないかもしれない。

しかし、散文や詩、戯曲等いろいろな場面における発話やテキストにあっては、幾層にも重なりあったコンテキストから文を眺めることによって、より深く立体的に理解できるのではないかと思う。そういった意味では、この試みも面白いものではないかと思う。

(文責 越田峰子)

参 考 文 献

- Bresnan, Joan. 1982. "Control and Complementation," *The Mental Representation of Grammatical Relations*, MIT Press.
- Bates, Elizabeth. 1976. "Word Order and the Mastery of Presuppositions," *Language and Context*. Academic Press.
- 乾 亮一 1974. 「外国語の表現に及ぼした英語の影響」『外国語と日本語』教育出版.
- 毛利可信 1975. 「英語の主語と日本語の主語」『言語』3月号. 大修館
- 寺村秀夫 1985. 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 戸川晴之 1972. 『英文表現法』研究社